民主主義の旗

No. 21
発行所
民主主義学生同盟
全国（準）委員会

（1部10円）

**お知らせ**

本第二十一号より、編集は全国大会に向けて結成された全国（準）委員会編集部によっておこないます。同盟全国化にともない、紙面を一層充実、大衆化し、全国学友の機関紙としたいと思います。読者の協力をおねがいします。

# 民学同全国（準）委結成、3月全国大会へ

## 全国学友へのアピール発表

昨年末、大阪、京都、岡山、東京を中心として、民学同全国（準）委員会が結成された。その後、三月四、五日の全国代表者会議、六日の全国大会（七、八日の交歓会）にむけて、全国（準）委員会は、その準備のための諸活動にとりくんでいるが、このほど、同盟全国化に際して「全国学友へのアピール」を発表した。

アピールは、(1)転機に立つ内外情勢、(2)情勢に規定された学生戦線の動向、(3)同盟の課題と同盟全国化の意義からなり、われわれに課せられている困難な諸任務、それをやり遂げねばならない重大な責任の自覚と決意を表明している。

アピールは、全国の学友に対して、われわれの共通の事業をともに成し遂げるよう呼びかけている。そして、全ての進歩的、民主的学友が民主主義学生同盟に結集することを呼びかけている。

アピールは、全国学友のものとならねばならない。そのためにはあらゆる建設的意見をとりいれ、豊富化されるべきものである。

### アピール

全国の学友諸君！　新年にあたり、民学同全国（準）委員会は、平和と民主主義のために、学生戦線統一のために真摯な努力を続けている全国の学友に熱烈な友情と連帯の挨拶を送る。

一九六三年九月一五日、大阪の地に登場した民学同は、その後、東京、京都、岡山等に建設され、今や全国津々浦々の学園に燎原の火のごとく燃え拡がろうとしている。大阪においてともされた一点の火花は、もはや消すことのできない大きな焔となりつつある。

安保闘争以後麻のように乱れた学生戦線は、昨年夏から秋にかけて明確に新らしい段階―分裂、細分化、地方分散性、手工業性から全国的組織結集への第一段階＝「全学連第三創世期」への過渡期―に突入した。

新段階を規定する情勢の特徴は何か？　新段階の特徴は何か？学生運動の課題と方針は？。

われわれは、ここに基本的見解を明らかにし、あわせて、全国のすべての進歩的、民主的学友が民主主義学生同盟に結集し、平和と民主主義運動の発展と統一のためにともに闘われんことを心から呼びかける。

（一）

#### 危険な「まき返し政策」と中国核実験

国際情勢は全体として、平和、民主主義、社会主義の側に有利に展開しつつも帝国主義の懸命のまき返し、緊張激化政策を完全に阻止しえてはいない。平和と社会主義勢力は、不幸な分裂も手伝って、アメリカ帝国主義のヴェトナム、ラオスへの数度にわたる執拗な攻撃を許している。アメリカ帝国主義のアジアでの限定戦争の志向は、極めて大きな危険を内包しており、特に警戒しなければならない。

中国核実験は、かかる挑発に対する有効な対処でないばかりか、放射能の増大、核拡散に道を開き帝国主義者の緊張激化政策に口実を与えるものであり、われわれは極めて遺憾に思う。われわれは帝国主義者がそれを口実にすることを断固阻止しなければならないが、中国が国連加盟をかちとり、平和と社会主義勢力の団結を強化し、軍縮と平和共存のために積極的に努力することを強く望むものである。

アメリカ帝国主義は、「新核安保」の意図を露骨に示しはじめた。だが、アメリカのいかなる投機的野望も、帝国主義間矛盾の激化と平和、民主主義、社会主義の諸勢力と強く連帯した民族解放運動の勝利的進行―A・A諸国の非資本主義的発展の前にもろくもついえ去るであろう。

資本主義体制は、「戦後期」から「戦後後期」への転換期にあり、その再編に向かって激動しつつある。ドル、ポンドの危機は、全般的危機の第三段階の新たな深化の象徴である。アメリカ帝国主義の相対的地位の低下と帝国主義間矛盾の激化はIMF・MLF問題にみられるように帝国主義体制の再編を日程にのぼしている。同時にイタリア、イギリス等の弱い環が形成されつつある。弱い帝国主義は、対社会主義圏貿易の拡大か、徹底的引き締めかの岐路に立たされている。だが、資本の原理的要求たる引き締め＝収奪体制の徹底化は、広汎な労働者人民の左傾化を促進している。イタリア選挙、イギリス保守党の敗北はその顕著な証明である。ケネディ・ラウンド―貿易自由化（本国市場の奪い合い）―の中で敗北した帝国主義は、労働者人民の燃え上がる反独占民主主義闘争の前に東西貿易拡大に踏みきらざるをえなくなるであろう。

#### 日本資本主義の転機と佐藤内閣の対応

日本国家独占資本主義もまた新らしい段階への移行を開始している。低賃金労働と外資依存により異常な発展を遂げた日本資本主義は米国の「四五カ月の繁栄」の終焉、国際的高金利時代への突入の中で一八米円にものぼる信用膨張をかかえ戦後最大の危機に直面している。倒産続出の不況ムードと消費者物価の上昇という〝インフレとデフレの奇妙な交錯〟が依然進行している。新たに登場した佐藤内閣は、長期方針の未確立のままで都合主義により危機をのりきろうとしている。だが〝危機〟の進行は、佐藤内閣の急速な反動化を促進しようとしている。

転換期日本の情勢のもとで、諸階級、諸政治勢力は新たな対応を示しつつある。佐藤に対する右からの圧力は強まりつつある。アメリカ帝国主義は、アジアでの中国封じ込め政策のたてなおし、「新安保」への日本の積極的協力を強く要求している。日本の大資本の中では、現在の〝危機〟を〝出せるだけウミを出す〟―中小企業の切り捨て、大独占への集中合併、農民の切り捨て、労働者の首切り、賃金ストップにより産業構造の〝高度化〟をはかる―ことによってのりきるべきだとする意見が強くなりつつある。このことは対内的には帝国主義上部構造の完成―小選挙区制、憲法攻撃を中心とする政治的反動総路線への突入であり、対外的には本格的な帝国主義的海外膨張政策の展開―そのための国内世論の統一（ナショナリズム攻勢）―を意味する。

#### 統一実現を急務とする民主勢力

これに対して平和と民主主義勢力は、深刻な分裂、低迷の中から新らしい指導部隊を登場させつつある。

労働運動は、昨年の春闘において、太田―岩井ラインの限界を突破すべき新らしい力強い努力の登場を示し、デフレ攻勢をはね返し、産業別統一闘争―産別組織への発展を不可避なものとしている。

平和運動は、分裂の極にある。かって平和運動の母胎であった原水協は、今や分裂の象徴となっている。原潜闘争も統一した闘いを実施しえなかった。原潜闘争が長期化した現在、われわれは短期決戦＝現地動員主義を克服し、政府支配層の、日韓会談の強行にみられるアメリカ帝国主義の極東政策と結びついた帝国主義的侵略外交から真の「自主平和外交」＝中立への転換をかちとる長期的方針のもとに、ねばり強い統一した闘いを追求しなければならない。分裂は自己の対立物―統一への要求を強めている。二つの原潜阻止実行委員会の統一の声が強まりつつある。われわれはすべての大学に平和組織を確立し、平和運動を強化し、セクト主義、政党系列化を排し、世界の平和運動と連帯した日本の平和運動の統一を実施しなければならない。

（二）

#### 学生戦線における新たなる波

学生戦線においても、昨年九月以降の原潜闘争は、安保以後つづいた分裂を学生運動の新らしい波が克服しつつあることを示した。大管法闘争以後、一貫して大衆闘争を展開してきた関西の学生運動において、層としての学生運動の基本的立場を堅持し、平和共存と民主主義の旗を高く掲げる部隊が、六・一九闘争以後の大衆闘争の昂揚の中で極左冒険主義＝街頭ラディカリズムを封じこめつつある。関西学生運動は今や学生戦線統一の先進的部隊としての規模と内容を着実に獲得しつつある。

東京都の学生運動は新らしい様相を呈しつつある。首都の学友は大衆的闘いに立ち上がった。情勢の緊迫化と分裂にあきあきした学友の統一への要求が、首都の政治諸潮流をして統一した闘いを強制している。学内主義的諸傾向も次第に克服されつつある。教育と学生生活に対する攻撃が激化する中で、学生の不満は増大し、首都、地方においてセクト主義のアカにまみれた政治諸潮流とは区別された新らしい無党派的政治活動家層が大衆闘争の指導部隊として登場しつつある。更に平民学連派が大衆闘争に積極的姿勢をとらざるをえなくなっている。平民学連系自治会の大衆行動の開始、それは、―指導部の主観的意図はどうあれ―自治会における大衆運動の基盤を形成するであろう。

#### 高まる統一実現の要求と二つの中心軸の形成

支配層の全面的、全戦線分野にわたる攻撃を前にして、学生運動の新らしい波は、擬制的ではあれ、全国的結集へ向かい、全国的統一行動の二つの中心―平民学連「全学連」と原潜日韓阻止学生共闘会議―を形成した。

平民学連指導部をして、それ自体、部分的自己否定である「全学連再建」へむかわしめたものこそ、学生戦線統一と全学連再建を強く望む全国学友の切実な要求であり、先進的自治会、地方学連の全学連再建へのたゆみない努力であった。しかしそれがまさに平民学連コースに接木されたところの歪曲された反映であることを看過することはできない。

昨年十二月平民学連「全学連」は結成された。この「再建大会」は、平民学連系自治会のみで一切の準備が行なわれ、再建に反対、保留の代議員、オブザーバーをあらかじめ前日の予備会議で組織的に排除した後に行なわれた。指導部は、これまでの分裂行動をなんら自己批判することなく「全学連」の名の下に、ほぼ限界に達した平民学連―民青の影響力の拡大をかちとり、全国学友の統一行動の実現でなく、行動の分裂の推進を合法化しようとしている。平民学連「全学連」が過去の分裂主義的政治路線を維持するかぎり、それは「全学連」の名による、全国、地方学連、自治会段階での分裂の拡大再生産と固定化をもたらす危険性をもっている。だが、同時に平民学連「全学連」の結成は、皮肉にも平民学連の変質の第一歩でもある。私的組織から曲りなりにも公的な全国組織に転化することによってそれは、全国学友の統一行動の要請に応えようとする試みであるからである。不幸はそれが運動の内容においてではなく形式においてのみ追求されているにすぎない、という点に存在する。だが、形式としての「全学連」は全学連であろうとするかぎり、全国組織＝全国運動体として自己を展開しなければならず、それは内容における民青の右翼的、セクト的方針との矛盾を深めざるをえない。大衆運動なき平民学連はありえても、大衆運動なき全学連はありえない。この形式と内容の矛盾は、必らずや平民学連「全学連」の変質を促すであろう。

トロツキスト諸派による今一つの「十二月全学連再建は、十二月「全自代」で、平和共存派のヘゲモニーの完全な貫徹により、名実共に粉砕された。「全自代」は一致する政治的諸課題の全国的統一行動を保障する「原潜・日韓阻止学生共闘会議」を結成した。学生戦線は、全国的組織的結集に向かいつつも、それが二つの全国的統一行動の中心として形成されるという、また、学生の無関心層の増大という限界を有せざるをえないという、そして、それを止揚する部隊が急速に成長してはいるが、いまだ全国的指導部隊として未成熟であるという過渡の時代を迎えているのである。

（三）

#### 学生運動の当面の三つの課題

過渡期の学生運動の前には困難な課題がある。

第一に、平民「全学連」による分裂の固定化、トロツキスト諸派による私的「全学連」再建を阻止しつつ、統一した全国的大衆行動のたえざる追求をつうじて、新情勢に対応する有効な闘いの中で、層としての学生運動を蘇生させ、真の闘う全学連の再建、統一をかちとることである。そのためには、原潜、日韓共闘会議の民主的強化、平民学連「全学連」を分裂活動の全国的中心から全国統一行動の一つの中心に転化させ、その変質の過程を速めるための全ゆる主体的な働らきかけの強化、そして、原潜、日韓共闘と平民学連「全学連」との統一行動の実現による全国自治会の統一行動の実現をかちとらなければならない。

第二に、原潜、日韓、小選挙区制、アメリカのアジアでの軍事干渉に対する闘争を強化し、日本の平和と民主主義運動の統一を促進、実現するために積極的に貢献することである。

第三に、主としてトロツキスト派によってさらには平民学連によって破壊された自治会機能（統一と民主主義）を回復することであり、不況のしわよせをくい、破壊寸前にある大学教育と学生生活の擁護、発展をかちとることである。支配層は、民主的教育、学問研究の自由、大学の自治、学生の生活と権利への不当な干渉と制限と圧迫を加えている。かれらは大学の全面的支配を企図し、大学を安あがりで独占資本と権力に柔順な学生を生産するための場にしようとしている。マスプロ教育、教員、教室の不足、カリキュラムのつめこみと非系統性は大学をして民主的で自主的な教育と研究の場からおよそ縁遠いものとしている。授業料の度重なる値上げ、大多数学生のアルバイトは学生を学問、研究から切り離し、学生生活を圧迫している。

国家独占資本主義の下で、独占の攻撃が国家を通じ系統的、体系的にかけられている現在、学生層のすべての進歩的、民主的要求の実現の闘争は、急速に政治闘争に転化せざるを得ない。これらの経済的、文化的要求の実現のための闘争、学問の自主的、民主的発展をかちとり、大学の民主的改革を実現する闘いは当面の中心的環である。

#### 全学連第三創世期への同盟全国化の意義

これらの課題を実現するためには、全国的大衆的学生同盟の建設なしには不可能である。本来その責を負うべき民主青年同盟が小ブル民族主義的セクト主義的方針の故にその任を果しえていない現在、新たに誕生した民主主義学生同盟がいかなる力量と政策をもつかに全てはかかっている。広汎な無党派的活動家を結集し大衆の進歩的、民主的な意識、要求、気分と密着し、それを意識的に体現した民主主義的大衆運動の展開の中で高度な政治的統一を実現し科学と民主主義の思想と理論を学ぶ民主的大衆同盟こそ増大しつつある広汎な無関心層を払拭し、過渡期の矛盾を止揚し真に闘う全学連再建、統一を可能にするであろう。

全国同盟として登場する民主主義学生同盟―それは層としての学生運動の指導的中核部隊であり、大衆性、科学性、戦闘性、民主主義に貫かれている組織である―は、輝かしき全学連第三創世期を必ずや担うであろう。民学同全国（準）委員会は、早期の全国化＝三月全国大会―をめざす活動を飛躍的に強化するであろう。

すべての民主的、進歩的学友諸君！来るべき全国大会へむけて民主主義学生同盟の旗の下に結集し、学生戦線の真の統一、平和と民主主義の偉大な実現のために、われわれと共に闘わんことを心から呼びかける。

一九六五年一月十五日

**輝かしき全学連第三創世期を担う**
**真に大衆的民主的同盟の建設を**

**全国（準）委員会**

# 民学同全国大会記念
# 全国学生
# 交歓会に結集しよう

全国の学友諸君！

日本学生運動は、今やその新しい局面、その転換期を迎えようとしている。過去数年におよぶ学生戦線の分裂と混乱に終止符をうち、輝やかしい日本学生運動の伝統を正しく継承し、全学連第三創世期をになうべく、わが民主主義学生同盟はもっとも先進的な闘いを展開してきた。そして今、全国的な大衆的、民主的同盟の建設のため、全国の学生運動の統一を願う民主主義的学生を結集して、三月全国大会を開こうとしている。

全国（準）委員会は、全国大会を記念し、ここに「全国民主主義学生交歓会」を企画した。

転機を迎えた内外情勢、情勢に規定された学生戦線の急速な動きそうした中での民学同の意義と任務等、われわれがかかえている課題は「全国アピール」にも書かれているように大きいといえる。

全国の学友諸君！

全国（準）委員会の企画した、明朗で、健康な「交歓会」に友情と連帯を深め、同盟三月全国大会の方針、諸先生の講演を中心に、平和共存、反独占民主主義の勝利への限りない熱情を養なおうではないか。

友情と連帯、率直で民主的な討論を基礎に、単一の全国的な大衆的民主的政治同盟＝民学同を建設し学生運動の発展統一のため、全国の学友の積極的な参加を呼びかけます。

**交歓会の内容**

**三月七日（第一日目）**

一、全体講演（一時～四時）
講師小野義彦氏（講演テーマは未定）
質問と討論（～六時）
一、交歓会（七時～十一時）
（楽しい企画を準備中です）

**三月八日（第二日目）**

一、分科会（九時～十二時）
文科会の内容と参加される諸氏
1　文学
中野重治氏（文学者）
2　文化運動
大門昌博氏（関西国民文化会議事務局長）
3　音楽鑑賞
栗原祐氏（大阪市立大教授）
4　平和運動
吉川勇一氏（前日本原水協国際部担当委員、前日本平和委理事）（交渉中）
5　教育問題（交渉中）
6　科学技術問題
杉浦俊男氏（日本原子力研究所高崎研究所研究員）
7　哲学
森信成氏（大阪市立大助教授―交渉中）
8　婦人問題
水沢ヤナ（婦人民主クラブ書記長）
一、全体講演（一時～二時半）
中野重治氏、吉川勇一氏等
一、学生運動の現状と展望
各地の闘争報告（～三時半）

**開催地**
比叡山延暦寺

**参加費用**
宿泊費、食費、参加費等
計　一、二〇〇円

## 平民「全学連」再建大会
## 一方的に強行さる

昨年十一月平民学連〝全学連〟が結成された。

(1)〝再建大会〟は「すべての自治会の参加」をうたいながら、あらかじめ前日の予備会議においてさえ、正式自治会代表、オブザーバーをも、阪大四学部、近畿大二学部、名城大二学部、宮崎大、東京教育大等、意見の相違を理由として、一方的に排除した後に行なわれた。

(2)〝再建大会〟は、以前「全国自治会の七割は平民学連に結集」と豪語していたにもかかわらず、その参加自治会数において、全学連十四回大会当時加盟自治会数二六四の内、加盟、未加盟を意識的にまったく無視して、一二七自治会、昨年十月平民系「全自代」参加自治会数をも大きく下まわり、しかも東京・九州のほとんどの主要大学の未参加の中で強行された。

(3)〝再建大会〟は、明確なる資格審査もないまま、その代議員は「執行部の決議だけでも入れる」という注釈までつけて事実選出され、しかも大阪府大・東大経済・茨木文理等のごとく、デッチあげ代議員ないしはそれに近い多くの代議員をも含んで強行された。

(4)そしてもっとも重要なことはこの〝再建大会〟は、単なる通り一返の「大会参加呼びかけ」によっては解決されえない平民学連方式＝意見の相違を理由とする行動の統一の拒否、ボイコット分裂戦線の継承の上に、強行されたということである。しかも大会討論およびその決議「規約についての申し合せ事項」の中において、大阪・京都・兵庫・九州各府県・地方学連への結集、民主的強化という当然に追求されるべき積極的解決への方向をなんら提起せず、あらかじめ運動目標と課題の一致、行動の統一の努力を放棄し、それを手前勝手な「修正主義者、分裂主義者」等のレッテル帳りによって合理化し、自らの勢力が「未成熟のところでは地方協議会を」という組織分裂のいっそうの深化に発展しかねない危険な方向を内包して強行された。

(5)以上のような事実を踏まえつつ、今後の方針確立に当ってもっとも注意し、踏まえなければならないことは、以下のことがあげられる。

(A)この平民〝全学連再建〟強行の背景には「これにより、トロツキスト、修正主義者、分裂主義者との徹底的闘争が大きく前進する」等の大会発言にも見られるごとく平民学連方式の破産を隠弊しつつその民族主義的、セクト主義的、分裂的方針を〝全学連〟という名において押し進め、さらには国際学連はもちろんのこと、平和運動（〝再建大会〟における即時「原水協」加盟）や、その他あらゆる平和、民主運動に、分裂を持ちこもうとする、共産党代々木派指導部および民青一部指導部の明確な意図の存在を忘れてはならない。

(B)にもかかわらず〝全学連再建〟そのものは、形式的には、皮肉にも平民学連方式＝意見の相違による行動の統一拒否、組織分裂の自己否定である。

なぜなら、全学連規約（組織性格、綱領部分、民主的運営等）をかかげることと、平民学連方式＝意見の相違を理由とした組織的排除とはまったく矛盾するものだからである。

また、その組織の「全国的」自治会連合としての性格は、大衆行動の一致した展開、統一的全国闘争を不十分ではあれ、展開あるいは、提起せざるをえないが、このことは「行動の統一」を一方的に拒否するという平民学連方式とまったく矛盾するものだからである。

問題は、民主的形式（全学連規約）およびその内容が、平民学連方式にもとづいて指導される限り形骸化され、否定されざるをえないということである。大衆運動なき平民学連はありえても、大衆運動なき全学連はありえない。

(C)そしてとくに注意しなければならないことは〝再建大会〟結集自治会の多くは、平民学連指導部の意図とは別個に、学生戦線統一と全学連再建を望む全国学友の切実な要求を、不十分な形ではあれ反映しているということ。それゆえに、この全国学友の切実な要求を真に実現させるための具体的積極的努力が必要とされるのである。

(D)したがって、真の学生戦線統一のために、これを分裂活動の全国的中心ときせる方向をあくまでも阻止し、一方において昨年十二月結成された「原潛、日韓学生共闘会議」の民主的強化をはかり、両組織間の統一行動の実現をはかりつつ、全国統一行動への一つの中心に転化させる、あらゆる積極的、具体的、主体的働らきかけを最大限追求しなければならない。

(5)それを可能ならしめる唯一の方向は、平和共存、反独占民主主義、層としての学生運動を明確に指向する諸潮流の、綿密な意志の統一、それにもとづく強固な結束であり、それを押し進めるべき広範な学友を結集した政治同盟の活動、および大衆運動の力強い展開である。とりわけ民主主義学生同盟こそが、その積極的・先進的役割を担わなければならないし、またそのための条件はいま同盟の全国化とともに着々と整備されつつあるといえる。

## 京大十二月選挙報告

昨年十二月、京都府学連の中心部隊である京大での同学会、教養自治会選挙が行なわれた。この選挙は、われわれにとって、二つの点で極めて重大な意味を有した。第一には、京大における自治会活動が、ほぼ完全な崩壊状況におちいっており、今選挙において如何にしてその再生をはかるのかという課題に対する明瞭な方針の提起が不可欠に要請されていたからであり、第二に、十一月に結成された民学同京大班にとって、十二月選挙は、初の試金石であり、その帰すうは、以後の同盟の活動に決定的な影響をおよぼすであろうからであった。結果からいえば、常任委員会の強力な援助もあって、われわれはこの試練に耐え、以後の飛躍への重要な陣地を築き得たのである。

投票の結果は次の通りである。

C　委員長
主流派（トロツキスト連合）　九二〇票当選
統一派（民青）　四九〇票次点
統一会議（民学同中心）　三三〇票
C　自治委員会　主流派　六〇前後
統一派　四〇余
統一会議　二〇弱
同学会代議員会（カッコ内は全学投票選出数）
主流派　約七〇（十九）
統一派　約四〇（六）
統一会議　九（五）

### 主流派の凋落

十二月選挙は、次のような注目すべき特徴を示した。①選挙は、全体として、極めて低調であった。多くの学生は、選挙への無関心を隠そうとせず、争点が大衆的に明確にならず、その結果、選挙期間は二週間余りにも延長され、最後まで原則的な宣伝活動を展開した政治潮流はわずかに統一会議のみという様相を呈した。それは繰り返される運動の分裂、政治主義的引回し、少数学生による街頭極左などが如何に運動を破壊し、学生を政治的無関心に追いやるかということの、余りにも痛ましい証明であったといわねばならない。②ここ数年にわたり、決して一、〇〇〇票の大台をわることのなかった主流派の委員長得票が、ついに九二〇票に落ち、反主流派票の総計がほぼ主流派票に匹敵するに到ったことは、主流派凋落の明瞭な表現であり、教養部学生の主流派指導への不信を示したものとして注目に値する。③統一派もまた、大巾に後退した。C委員長得票では、前回より二〇〇票余りを減じ、D代議員では二〇の代議員数を減じ、とりわけ、全学区選出代議員は、十五名の候補者中九名までも落選するに到った。その決定的原因は、いうまでもなく、露骨な〝ボイコット分裂戦術〟への学生の批判にあるが、今一つ指摘されるべきは、統一派の唯一の宣伝の武器であった〝全学連再建〟のセクト的誤り

## 京大学生運動再生へ向けて
## 統一会議（民学同）大きく前進

が、完膚なきまでの大衆の批判にあって、ついには〝全学連再建〟を確信を持って語ることが不可能となったことである。この事実は、平民〝全学連〟の分裂行動に対するわれわれの断固たる批判の必要性をはっきりと教えている。④最後に、最も強調されねばならないのは、発足してわずか二カ月の民学同を中核とする統一会議が、良心的学友、無党派活動家を基盤に、確実な支持を獲得し、多くの予想を裏切って第三党に進出したことである。決して多くはない組織力量ながら、われわれは、その政策と宣伝において、常に選挙戦におけるイニシアティブを発揮することができた。主流派と統一派の不毛なセクト主義を止揚する新しい指導部隊の登場と、その一定の大衆的支持の獲得は、崩壊した京大学生運動再生の第一歩として、進んで、全国的規模での、民学同と平和共存派学生による新たなるヘゲモンの登場を京大において担ったという意味において、学生戦線統一への確実な礎石を置いたのである。

### 第三創世期を担って

①全国闘争の二つの中心の形成、②無党派活動家の増大、③全国的な単一ヘゲモニーの未形成を特徴とする〝全学連第三創世期への過渡期〟を迎えた学生戦線にあって、この過渡期を止揚するには、民学同の全国的な強化とイニシヤテイブの拡大が必要である。京大選挙は、この過渡期の三つの部隊を公然と登場させ、同盟京大班は、過渡期を止揚するための第一歩を踏み出した。われわれのかちとった成果は、もちろん極めてわずかであり、果すべき偉大な事業に比すれば、とるに足らないほどの端初にすぎない。われわれは、理念と宣伝による学友の結集にとどまらず、具体的行動を通じての結集をめざして闘うことによって、影響力の飛躍的拡大をはからねばならない。それのみが十二月選挙の唯一の実践的総括であろう。生まれたばかりの民学同京大班は、全国の仲間と共に、今、われわれの共同の事業のための新しい闘いをはじめている。

―京都編集局―

## 原潛日韓学生共闘結成
## 第二全学連への野望粉砕さる

(1)京都社学同を中心とするトロツキスト諸派によるいま一つの「十二月全学連」デッチあげは、昨年十二月「全自代」において、大阪府学連をはじめ、神戸大・立命・岡山大・東教大を中心とする部分の完全なる原則性と指導性の貫徹により、名実ともに粉砕された。

(2)「全自代」は、さらにトロツキスト諸派の中央委員会・常任委員会体制をもつ「全国学生自治会共闘会議」なるもののデッチあげを拒否し、現在の学生戦線の状況の中で、当面する具体的課題にもとづき全国的統一行動を保障するものとして「原潛・日韓学生共闘会議」を結成した。

(3)「全自代」は、原潛・日韓共闘の組織体制を以下のごとく決定した。幹事校―九大学友会(九州)　神戸大（兵庫）阪大（大阪）京大（京都）事務局校―立命、京大、幹事校会議は全員一致制。

(4)重要なことは、この原潛・日韓共闘の民主的強化を最大限追求する中で、トロツキスト諸派のあらゆるセクト的方針、極左冒険主義＝街頭ラディカリズムを拒否し平民学連〝全学連〟との統一行動実現のためのあらゆる努力を追求し、全国全自治会の統一闘争実現を勝ちとることである。

(5)それを可能ならしめる唯一の方向は、平和共存、反独占民主主義、層としての学生運動を明確に指向する諸潮流の、綿密な意志の統一、それにもとづく強固な結束であり、それを押し進めるべき広範な学友を結集した政治同盟の活動、および大衆運動の力強い展開である。とりわけ民主主義学生同盟こそが、その積極的・先進的役割を担わなければならないし、またそのための条件はいま同盟の全国化とともに着々と整備されつつあるといえる。

## 12月交歓学習会
## 友好と連帯深める
### 全国から二〇〇名参加

わが同盟主催の交歓学習会が、二〇〇名におよぶ学友が参加し、十二月二十五、二十六の両日、京都において行なわれた。これには、東京から九州に至る全国各地から友好と連帯を深めた。

第一日目は、小野義彦大阪市大教授が、現在の内外情勢、せまりくる資本主義諸国の不況と政治反動とそれに対応する全世界人民の平和共存と民主的権利を拡大する運動を、具体的事実を豊富におりこみ講演された。

第二日目には、学生戦線統一への、各地方の運動の報告と展望が語られ、全国の学友からもっとも信頼され、期待されているわが同盟の大衆運動をバックにした飛躍的前進の中で、学生戦線の真の統一を勝ちとることを、全員で誓いあった。

この報告の中では、京大統一会議の過去数年にわたるねばり強い不屈の統一への闘いが、とりわけ集まった学友に感銘を与えた。

その後、吉村市大教授より講演があり、労働情勢と労働運動が現在かかえている諸問題とその克服への道が、学生が学生活を豊かな実りあるものにしていく見地から、労働運動と学生運動の戦闘的連帯の見地から、鋭く追求された。労働運動の昂揚いかんが、学生運動に巨大な影響を与えることを、それ故に学生運動が真に労働運動との連帯を深っていくための努力の必要性が痛感された。

大阪学生唯物論研究会では、大阪唯研の先生方の援助を得て、恒例の春期講座を次のように行なうことを決定した。

二月二十一日「民主主義と疎外」（森信成市大助教授）

二十二日「独占イデオロギーの諸形態―期待される人間像批判―」（山本晴義大阪経大助教授）。

二十三日「戦後日本労働運動史」。

二十四日「春闘をめぐる労働運動の課題」（吉村励市大助教授）―交渉中―。

なお、時間、場所は、一時から、大阪市大専門七教室（二階）で行なう。

昨年の四・一七ストにみられるごとく、日本労働運動の質的転換が指摘され、現在日本の労働運動は大きな曲り角に立たされている、といわれている。このような労働運動における情勢、そしてそれを日本の労働運動の歴史的構造を明らかにすることによって一層深く把握すること、その上に立って、春闘の課題と展望を明らかにすることのため吉村先生に講演をしていただく。

森先生の講座においては、現在、民主陣営においてその理解をめぐって多くの混乱を見せている民主主義と疎外の概念を明確化されるであろう。

山本先生には、先日公表された、中教審中間答申案〝期待される人間像〟批判を通じて、現在の独占思想攻勢の要であるナショナリズムと近代化論を中心に、反動思想の系譜を明らかにしていただく。

大阪学生唯研より

## 春期講座への案内